

「私のために命を捨てる人」

先ほど歌いました讃美歌 21 の 97 番は、牧師になるための儀式である按手礼式と、教会に牧師が就任する際に行う牧師就任式の時に歌われるものです。ほぼほぼ按手礼式と牧師就任式以外では歌うことのない讃美歌なので、あまり知名度は高くありません。あと、これは個人的な感想ですが、常日頃の礼拝では、男性も女性も出席して讃美歌を歌うので、高い声もあれば低い声もあって、それらが混ざり合い混声合唱団のような響きになります。しかし、按手礼式や牧師就任式となると、現状どうしても男性の参加が多くなり、男声合唱団のようになってしまいます。それは、按手礼式に招かれる牧師と言う役職のほとんどが男性であり、また、牧師就任式に集う各教会の代表者にも男性が多いという実情があるからです。なので、この讃美歌 21 の 97 番も、今まで私が聞いてきたものは、男性の野太い声のものばかりでした。今日は、そうじゃない讃美歌 21 の 97 番を聞くことができ、私は新鮮な思いでいます。これは、今日の主要テーマではありませんが、もしも、皆さんが中部教区総会とか、牧師の研修会とか、按手礼式とかに出席されますと、多分、そこで歌われる讃美歌の声の低さにビックリすると思います。それはそれで迫力のある歌声ではあるのですが、ただ、現在、日本基督教団のみならず、多くのキリスト教組織で抱えているジェンダー格差の、耳で分かる実情だと言えます。日本のキリスト教は、これからも変わっていかないといけないなあ、と個人的には思っています。

という社会状況への気付きも与えてくれる讃美歌 21 の 97 番なのですが、この讃美歌は「理想の羊飼い」について歌っています。「我らの理想の羊飼いはイエス様である」と。そして、牧師とは、理想の羊飼いであるイエス様に助けられ、学ばされ、導かれて、良き牧師となるように、と押し出

されていくのだと。現代的な言い方をしますと、イエス様と言う方は、専門家の専門家と言いますか、教師の教師と言いますか、つまり、その道のプロを指導する、もっとすごいプロということですよ。スーパーバイザーなんて言い方もあったりします。要するに、イエス様とは、今、生きて牧師をしているすべての人たちの教師であり、理想像であるということです。そして、牧師になるための按手礼式や、教会に牧師が仕えるための牧師就任式では、「今ここに新たに任命される人物が、イエス様に倣って良き牧師となりますように」と祈りつつ、この讃美歌 97 番を歌うわけですね。牧師の「牧」という字は、牧場や放牧という言葉に使われる「牧」の字で、飼い主という意味を持っています。牧師とは、神様から与えられた信徒という名の羊を守る、羊飼いであるというわけです。ただし、神様とイエス様の目から見れば、牧師もまた「羊」の一人であることに変わりはなく、「羊飼いの羊飼い」であるイエス様がいなければ、牧師も教会も立ち行かなくなってしまう。今日の聖書の言葉は、「イエス様こそ最も良い羊飼いである」ということを伝えています。そして、その主張の根拠として、この文中に 2 度出てくるのが「わたしは羊のために命を捨てる」という、その身を惜しまないどころから、その命さえ惜しまずに差し出す程の、深い覚悟と愛情の伴った言葉であります。「イエス様は羊のために、私たちのために命を捨てる」。「それが良い羊飼いというものだ」と。事実、イエス様は、良い羊飼いとして、私たちの救い主として、2000 年前に、十字架に掛かって死なれました。「命を捨てる」という約束を果たされたのです。それは、神様の導かれる、この歴史における最初で最後の「完璧な十字架」でありました。言い換えるなら、「完璧な死」、「完璧な犠牲」と言えるものです。2000 年前に、イエス様は「神様の子として、最も値高い犠牲の仔羊」として、死なれたのです。実は、ここに少々複雑なキリスト教の考え方があります。つまり、イエス様は理想の羊飼いであり、一方で、理想の犠牲の仔羊でもある、という事です。

イエス様は、「羊飼いの羊飼い」という、立派で頼もしい権威ある方でありつつ、羊である我々よ

りもさらに屠り場に近かった「羊の中の羊」でもありました。イエス様と言う方は、私たちの考える「立派さ」や「頼もしさ」において素晴らしく、群を抜いている一方で、私たちの考える「弱さ」や「無力さ」においても、ある意味、突出されていたのです。イエス様には、私たちの目から見れば、全く相反する両極端な性格・役割がありました。「羊飼いの羊飼い」である一方で「羊の中の羊」であると。しかし、その両極端な性格・役割と言うのは、その両極の間にある、すべての人々のことを代表できる、ということでもあります。イエス様は、立派で頼もしい羊飼いであるのだから、私たちの中にいる立派で頼もしい人の心を代弁し、力付けることができます。その一方で、イエス様は弱く無力な羊でもあるため、私たちの中にいる弱く無力な人の心をも理解し、寄り添うことができるのです。イエス様の深い覚悟と愛情から、はみ出す人は一人もいません。立派な人のことも、力ない人のこともイエス様は受け入れてくださる。分かってくくださる。それが、究極的な「良い羊飼い」である、ということです。本当に良い羊飼いは、その群れの最も弱く力ない羊のことも理解し、配慮を忘れないのです。だから、私たちはイエス様の前で、時には立派に振る舞い、誰かの何かの役に立つことを一生懸命に目指すことがあって良い反面、時には弱く小さくされた仔羊のように頼りなく怯えていても良いのです。イエス様は、そのどちらの場合も、ちゃんと支え導いてくださいます。

そして、今日の聖書箇所 16 節の部分にも大切なことが書いてありました。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かねばならない」と。イエス様という方は、ある意味、欲張りで、今ご自分の手元に置いてある羊だけでは満足されないということです。「ほかの羊もいる」。この「いる」という言葉は、もちろん「そこにいる」、「そこに存在する」という意味ですが、「それを必要とする」という意味の「いる」と読み替えても良いと思います。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊も、大切なのであり、必要としているのだ」と。「ほかの羊

も要るんだ、欲しいんだ」と。そんな主張として聞くこともできます。それは間違いなく欲張りなわけですが、イエス様の守備範囲は、本当に広いです。立派な人にも、弱い人にも、すでに囲いの中にいる人にも、まだ外にいる人にも、イエス様は手を差し伸べてくださっている。繋がりたいと思っておられる。今日の聖書箇所が含まれているヨハネによる福音書には、もう一つ有名な「ぶどうの木」のたとえも載っています。「イエス様はぶどうの木である」と。時に羊飼いであったり、時に羊であったり、時にぶどうの木だったり、イエス様は、色々な役割を熟さねばならず、忙しい方だなと思います。イエス様は「ぶどうの木」であるとすれば、その欲張り加減は、実はよく分かります。「ぶどうの木」って、物凄く枝を伸ばすのが早いんですね。そこの園庭に生えているぶどうの木を観察していると良く分かります。隣に生えている金木犀や桜の木に取り付いて、どんどん伸びて大きくなっていきます。「イエス様はぶどうの木である」というたとえ話をしといて、失礼な話ですが、園庭のぶどうの木は、あまりにも伸びるものだから、この前、金木犀に纏わりつく枝を切ったくらいです。それほどにぶどうの木は力強く、枝を伸ばしていく。そして、イエス様も、それくらいの勢いで手を差し伸べ、繋がろうとされるのだ、ということです。

最も良い羊飼いであるイエス様は、あらゆる人を受け入れてくださいます。立派な人も、弱い人も、近くにいる人も、遠くにいる人も。あと付け加えるなら、善い人も、悪い人も。すべての人たちを囲い、守り、また招いてくださいます。そして、その上で、「羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるために」、ここに来て、命さえ惜しまず、差し出されるのです。「羊が命を受ける」と言うのは、ちょっと難しい言い回しですが、ようするに「元気になるため」と言い換えて問題ないでしょう。「幸せに生きていくため」でも良いと思います。イエス様は、私たちが元気に幸せに生きていくために、命を捨てることを躊躇わないのです。それほどに私たちのことを愛してくださっているのです。

確かに、そんなイエス様の「愛」を、触れて感じて、理解することは簡単ではないかも知れません。私たちの人生は、常に愛に満たされていると思えるほど、優しくはありません。ただ、私たちが「そこにイエス様の愛があるはずだ」と、少し見方を変えて生きてゆくならば、小さな恵みの一つ一つに気付くことはできるでしょう。「自ら好んで絶望したい」と思うなら必要ありませんが、少しでも希望が欲しいと願うなら、きっとイエス様の愛の片鱗は、すでに私たちに知れる形で用意されていると思います。今日の聖書でも「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」と言うのだから、羊である私たちには、すでにイエス様の愛に気付くための知恵と知識が、きっとあるのだと思います。

私たちには、私たちのために「命を捨てる人」がいます。それ程までに私たちを愛して、守ってください。イエス様がいます。そのことを信じて、希望と喜びを見出す日々をご一緒に過ごして参りましょう。お祈り致します。

神さま。

今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、羊である私たちが迷わず幸せに生きられるようにと、最良の羊飼いであるイエス様を与えてくださいました。今日も、きっとイエス様が私たち一人一人の名を呼んで、ここに導いてくださったのだと信じます。そのようにして、どうか、今日から始まる1週間も、あなたのお招きの内に、イエス様の導きを信じて、迷わず歩んでゆくことができますように。自分の幸せのために、隣人の喜びのために、心を込めて、丁寧に過ごすことができますように。私たちの言葉と行いとを支えていてください。すでにイエス様の囲いの中にいる人の上に、まだ、囲いの外にいる人たちの上に、等しく、あなたの祝福と恵みが豊かに注がれますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。